

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ケンサキイカ

学名 *Loligo edulis*

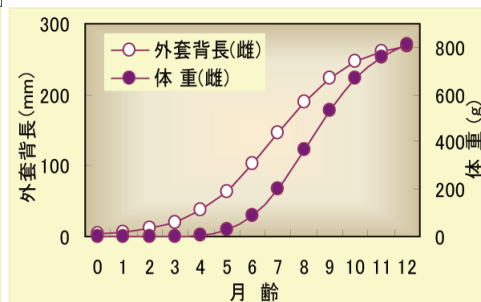
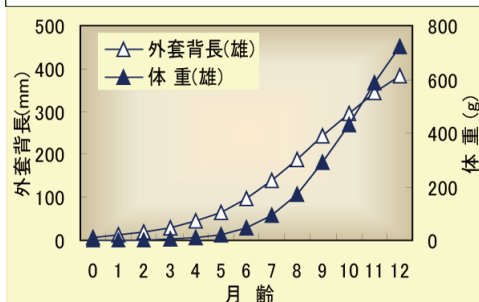
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1年
成熟開始年齢: 外套背長70～80mm(約5カ月)
産卵期・産卵場: 周年産卵するが、産卵盛期は春～秋季
索餌期・索餌場: 複数の発生群が存在し、それぞれに回遊経路は異なると考えられている
食性: 小型の魚類、甲殻類、軟体類を捕食
捕食者: 不明

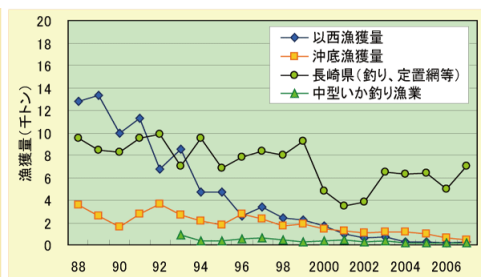
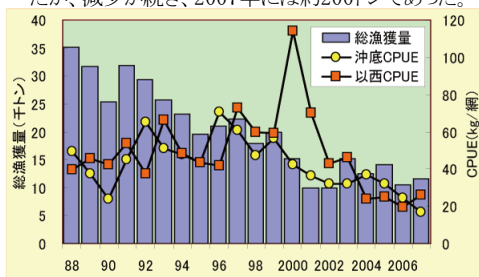


漁業の特徴

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲され、総漁獲量のうち長崎県が大きな割合を占め、盛漁期は夏季である。沖合域では底びき網漁業が主体となる。沖合底びき網漁業(以下、沖底)では長崎県沖合～山陰沖の広範囲に漁場が形成される。日本海沿岸域では盛漁期は夏から秋にかけてである。東シナ海では以西底びき網漁業(以下、以西)が主体となり、主に夏季に東シナ海南部で漁場が形成されていたが、2004年以降この海域にほとんど出漁していない。1991年からは6～10月に東シナ海南部で中型いか釣りの試験操業が行われている。

漁獲の動向

日本海西部～東シナ海における漁獲量は1988年には35千トン余りだったが、変動しながら減少し、2001年以降は10千トン前後の漁獲量となり、2007年には約12千トンであった。九州西岸～日本海西部では1988年の約24千トンから変動しながら減少し、2007年には約11千トンであった。一方、東シナ海南部は1988年には約10千トンの漁獲量であったが、減少が続き、2007年には約200トンであった。



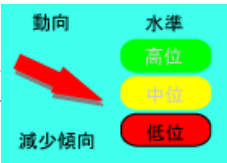
資源評価法

沖底、以西、中型いか釣り漁業および沿岸域で主体となるいか釣り漁業の漁獲動向から資源動向を判断した。沖底と以西では漁獲努力量が減少しており、特に以西で減少傾向が著しいことから、CPUE(努力量あたり漁獲量)を資源動向の指標と考えた。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業の漁獲量およびCPUEを資源状態の指標として考えた。

資源状態

沖底、以西、中型いか釣り漁業のいずれもCPUEは減少傾向が続いており、低い水準にある。一方、各県代表港における漁獲量およびCPUEの水準は異なるが、おおむね中～低水準とみられ、最近5年間で見るとほとんどは横ばい傾

向にある。主要漁業のCPUEを総合して算出した来遊量指数は最近5年間(2003～2007年)の年ごとの変化率が平均0.91/年で、やや減少傾向にある。また、2008年に入り、漁況は低い水準が続いており、動向も減少に転じたと判断した。



管理方策

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004年以降は、かつて主要な漁場となっていた東シナ海南部における漁獲量が落ち込んでいるが、この海域には中国船も多数出漁しており、漁獲実態を把握するのは困難である。現状では資源の指標値に合わせて漁獲することが現実的であろう。資源水準は低く、減少傾向にあることから、現状より少ない漁獲量にとどめることが望ましい。

	2009年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	9千トン	0.8C2007	－	－
ABCTarget	7千トン	0.8・0.8C2007	－	－

資源評価のまとめ

- 資源水準は低く、動向は減少に転じた
- 2004年以降以西底びき網漁業は東シナ海南部漁場にはほとんど出漁せず、この海域における漁獲量が落ち込んだ
- 2008年に入り、沿岸域での漁況は低い水準が続いている

管理方策のまとめ

- 現状では資源量の指標値に合わせて漁獲するのが現実的であろう
- 東シナ海全域での資源状態の正確な把握には、関係国間の協力が必要である

資源評価は毎年更新されます。